

# 児童期・青年期における感情コンピテンスの特質と 発達の傾向に関する検討

(中間報告)

神戸大学大学院人間発達環境学研究所 森口竜平

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe  
University.

**【キー・ワード】感情コンピテンス, 児童期, 青年期, 発達の变化**

## 問題と目的

近年、友人関係をうまく形成できない子どもが問題になっており、その原因としてソーシャルスキルの欠如だけでなく、自分の感情を適切に伝えたり、相手の感情を適切に理解したりするといった感情スキルの欠如が考えられる。このような背景から、社会適応行動に対する感情の機能は重要視されるようになっており（大対・大竹・松見，2007），その中でとりわけ感情コンピテンスという概念が注目されている。

感情コンピテンスは、「感情が引き出される社会的相互作用の中における自己効力感の現れ」と定義され（Saarni，1997），感情が引き出されるような社会的相互作用において自己効力感をもつために必要なスキル（以下，感情スキル）から成り立っているとされる（Saarni，Campos，Camras，& Witherington，2006）。つまり，感情コンピテンスとは「感情スキルを状況に応じてうまく使用できることにより得られる効力感」と考えることができる。

感情コンピテンスは，他者と関係を構築したり相互作用したりするための子どもの能力として重要であると同時に（Parke，1994；Saarni，1990），それを獲得した際の効果として，感情の管理やストレス状況下における自尊感情の高揚，レジリエンスが考えられている（Saarni，1999）。このように，感情コンピテンスは，他者との円滑な人間関係の構築・維持などの外的適応と，個人内における心理的適応などの内的適応の両側面に影響を与える概念と考えられる。

Saarni（1990）が感情コンピテンスという概念を提唱して以来，それと社会的な成功を予測する変数との関連についてさまざま研究されている。（Denham，Blair，DeMulder，Levitas，Sawyer，Auerbach-Major & Queenan，2003；Ciarrochi & Scott，2006；Saarni，2007；久木山，2002）。それらの研究を概観すると，以下の2点の問題があると考えられる。

まず，感情コンピテンスの研究は感情コンピテンスの研究自体が乳幼児を対象にしたものが多く（Eisenberg，Fabes，Murphy，Maszk，Smiht & Karbon，1995；Denham，1998），児童期中期から青年期にかけての感情コンピテンスについて研究がほとんどなされていない点が挙げられる。子どもは児童期において次第に自律的に感情コンピテンスを成り立たせていくようになり（久保，2008），さら

に青年期では、児童期において獲得されたメタ認知や高度な感情調整を巧みに用いながら、自己、他者、そして周囲のその他の他者等について認識し、理解を含め、より多層的な情動が経験するようになる（山本、2008）。このように認知発達が進み対人関係が複雑さを帯びてくる児童期中期・青年期の感情コンピテンス、およびそれを構成する感情スキルの様相について検討することは意義があると考えられる。

2つ目に、現在我が国において、感情コンピテンスに関する研究は久木山（2002）以外ほとんど見当たらない点が挙げられる。感情コンピテンスは文化的文脈に組み込まれていることや Saarni 自身がいうスキルは西洋文化の中で必要とされるスキルであることから（Saarni, 1999）、わが国の文化に即した感情コンピテンスやそれを構成するスキルの内容について検討する必要があると考えられる。

そこで、本研究では、友人関係などにおいて円滑な対人関係の構築と維持がより重要となる児童期中期から青年期における感情コンピテンスに焦点を当て、①どのような感情スキルが必要とされ、どのように獲得されていくのか、②その感情スキルがどのように発達していくのかを中心に検討し、さらに、③その感情スキルの不足を学習させるためにどのようなプログラムが構想できるかを明らかにすることを目的とする。

まず予備調査として、特に高校生を対象に、感情コンピテンスを構成するスキルの内容について、久木山（2002）に従い自由記述を用いて検討する。

## 方 法

**対象** 大阪府内の公立A高等学校2年生2クラス計105名（男子54名、女子51名）。

**手続き** 質問紙による調査を行った。久木山（2002）に従い、『友人関係を良好にするために、感情や気持ちの面で心がけていることはありますか？ どんな些細なことでも構いませんので、思いついたまま書いて下さい』という質問への自由記述回答を求めた。調査は、教科担任により、授業時間の一部を利用しクラス単位で行われた。

## 結 果

### 1. 分析方法

まず、得られた回答のうち、感情スキルの内容として適切でないものを除き、感情スキルとして適切であると判断された回答を1件ずつカード化した。次に、筆者と心理学専攻の大学院生2名によって、全てのカードを内容的な類似度に従ってKJ法によって分類した上で、カテゴリー構成した。不一致があった場合には、その都度協議し、カテゴリーの整理と修正が行われた。

### 2. 感情スキルのカテゴリー構成

高校生の感情スキルは、同調、抑圧、他者配慮的行為、他者感情の読み取り、本音表出、笑顔の5

つに分類された。

**同調：**「できる限り相手に合わせようとは努力する」や「愛想笑い」などであり、他者の感情にできるだけ合わせようとすることを表している。

**抑圧：**「我慢する」や「些細なことで怒らない」「あまり感情を表に出さない」などであり、友人関係を円滑に進めるために、自分の中に起こっている感情を表さずに抑えこむことを表している。

**他者配慮的行為：**「相手をいやな気持ちにさせないようにふるまう」や「何気なく言った一言が相手を傷つけてしまわないように振舞う」など、他者を傷つけないように、感じている感情の強さや感情の表出の度合いを調節することを表している。

**他者感情の読み取り：**「相手の気持ちをものすごく考える」「相手の気持ちを受け入れる」など、他者がどのような気持ちか考えることを表している。

**本音表出：**「本音をぶつける」「ありのままにいる」など、自分の感じている気持ちをそのまま友人に表出することを表している。

**笑顔：**「なるべく笑顔でいること」「いつも笑顔でいる」など、友人関係を円滑にするために、笑顔を常に作ることを表している。

## 考察と今後の課題

高校生という時期は、他者に気を遣い自分を出せない中学生の時期から、自分をさらけ出し深い付き合いができるようになる大学生の時期に至るまでの過渡期と考えられ（落合・佐藤，1996）、感情スキルに関しても同調や本音表出など様々現れていると考えられる。

その中で特に高校生は相手の気持ちを考えるということを非常に重要視していることがうかがえた。渡部・松井（2008）によると、教師は現代の高校生が自己をコントロールできずに、相手や周囲への配慮が欠けた一方的な行動をしていることを問題視しているとしているが、今回の結果はそれとは異なるものである。高校生自身は、友人関係を円滑にするために、他者のことを考え、他者の気持ちを傷つけないように気をつけていることが明らかとなった。

また、本予備調査において明らかとなった感情スキルは、Saarni（1999）が想定している感情スキルと質的に異なっている。藤本・大坊（2007）は、コンピテンスに関する因子のうち、自由記述からボトムアップに抽出された因子には性質の異なるスキルが混在していることを指摘し、スキルという概念をストラテジー、ソーシャルスキル、コミュニケーションスキルの3種類に分類される階層的なものとして捉えている。今回明らかとなった感情スキルは、Saarni（1999）の感情スキルを組み合わせたより上位の感情スキルと考えられた。今後感情コンピテンスを構成するスキルを検討していく上でも、階層的な視点を含めて検討していく必要であると考えられた。

今後の予定として、研究1では、小学校高学年・中学生にまで対象を広げ、予備調査と同様に自由記述により感情スキルに関する項目収集を行う。研究2では、①各学年約40名約480名を対象として、研究1で作成した項目プールを内容として質問紙調査を実施し、児童用及び青年用感情コンピテンス尺度を構成する。②感情コンピテンス尺度得点に基づき、量的に発達の検討を行う。研究3では、

研究1と研究2の総合的検討を行い、感情コンピテンス形成のための学習プログラムを構成したいと考えている。

## 引用文献

- Ciarrochi, J. V. & Scott, G. (2006). The link of between emotional competence and well-being : a longitudinal study. *British Journal of Guidance & Counseling*, **34**, 232-243.
- Denham, S. A. (1998). Emotional development in young children. New York: The Guilford Press.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Maszk, P., Smith, M., & Karbon, M. (1995). The role of emotionality and regulation in children's social functioning : a longitudinal study. *Child Development*, **66**, 1360-1384.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, **15**, 347-361.
- 久保ゆかり (2008). 児童期の感情 上淵寿 (編) 感情と動機づけの発達心理学 ナカニシヤ出版 pp. 105-124.
- 久木山健一 (2002). 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連—アサーション行動を対象として— カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- 大対香奈子・大竹恵子・松見淳子 (2007). 学校適応アセスメントのための3水準モデル構築の試み 教育心理学研究, **55**, 135-151.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- Parke, R. D. (1994). Social and emotional developmental in a relational context : Friendship interaction from early childhood to adolescence. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York : Wiley. pp. 95-131.
- Saarni, C. (1990). Emotional Competence. In Ross Thompson (Ed.), *Nebraska symposium : Socioemotional development*. Lincoln, University of Nebraska Press. pp. 115-161.
- Saarni, C. (1997). Emotional competence and self-regulation in childhood. In Salovey, P. & Slutter, D. J., (Eds), *Emotional Development and Emotional Intelligence : Educational Implications*, pp. 35-69.
- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L. A. & Witherington, D. (2006). Emotional Development : Action, Communication, and Understanding. In W. Damon (Editor-in-Chief) & N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology : Vol. 3. Social, emotional, and personality development (6th ed.)*. New York : Wiley. pp. 226-299.
- 渡部麻美・松井豊 (2008). 教師の視点から見た高校生の友人関係における問題 筑波大学心理学研究 **36**, 25-31.
- 山本良子 (2008). 青年期・成人期・老年期の感情 上淵寿 (編) 感情と動機づけの発達心理学 ナ

児童期・青年期における感情コンピテンスの特質と発達の傾向に関する検討

カニシヤ出版 pp. 149-166.

